

## 第九交響曲とファウスト

石倉小三郎

ドイツ文学と音楽史とに両脚さし込んでゐる今の私としては、表題の如き問題を取扱う事は極めて自然な事として各位の御諒承を得ることは存じますが、私としてはこの問題については格別に面白い思ひ出があるのであります。それは一八九九年明治卅二年の事であるが当時唯一の綜合雑誌、高山樗牛が椽大の筆を揮つていたところの太陽に、十九世紀の三大作としてファウスト、種の始原、第九シンフォニーの三つが出ていた。私はその時一高二年生在学中で、ゲーテ、ダーウィン、ベートーヴェンの名だけは知つていた。またファウスト、種の始原が何であるかは、おぼろには知つていたが、第九とは何の事やら如何なるものやらさつぱり分らなかつた。そこで今年がダーウィンの百年祭とやらに当る事を此程新聞で見た時、私に五十八年前のこの記憶が急に蘇つて来たのであつた。私は其後音楽史の研究に志して、一九〇五年に、とも角わが国最初の西洋音楽史を著し、博文館の帝國百科全書の第百三十六篇として公刊されたので、今日では音楽学の創始者と目されて音楽学会の名譽會員に推薦されたりして甚だ忸怩たるの感に堪えないわけであるが、その思ひ出が私をして今茲に表記の題を思いつかしためたわけなのである。と云つても私が新たに思いついたわけではなく、実は既に百余年前にリッヒャルト・ヴァーグネルがやつている事なのであるがそれを茲に翻譯し解説しようとするだけである。いつも私の仕事はそうで

あるが、今日も亦ただ解説者の仕事をするだけであつて、そこに独自の研究たるの点は毫末もない、それだけの誇りも野心も持ち合せていない。いつもの事ながらこの事をば予め、お断りして置きたいと思ふのである。

ファウスト一部が完結されそれが全集の第八巻としてコッタ書肆によつて公刊されたのは一八〇八年復活祭の後であるから、今から逆算すれば正に百五十年前の事である。そして第九がヴァーンで公演されたのは一八二四年五月七日であつた。勿論これは大成功で人々は圧倒的な感銘をうけたものではあつたが、その演奏も余り立派なものではなかつたし、その後ロンドンでの公演ドイツの他の諸市に於ても批評はまちまちで、云わば大声俚耳に入り難しの憾みは明かに存在していたのである。ロッスイーニの崇拜の熱が時尚盛んで、人々みなイタリヤ式のただ耳の快感をそそる様なものに眩惑されていた時代に於ては、この大作は到底大衆のものとはなり得なかつたのである。ヴァーグネルの時代に於ても一般の風尚はまだその程度であつたので、彼は一八四六年に於てドレーデンに於てその王室附指揮者として第九を演奏するに際し、そのための解説的プログラムを附ける事の必要を感じ、その為には彼はファウストを利用したのである。つまり第九の初公演より二十二年の後に於て、それより三十八年前に発表されたるファウストを藉りたのである。因に述べておくがわが国に於て第九が始めて演奏されたのは大正十三年十一月三十日であつた。その前年頃私は滞独中信時潔氏と多くの音楽会に同行して實際的に種々の教示を受けたのであつたが、そのとき同君の云われた「もう上野で第九をやれますよ」との言葉を感慨深く聞いたのであつたが、同君の帰朝と共にそれが実現されたのが、それである。大正十三年は正に一九二四年である。ヴァーンに於てのその初演の丁度百年目に於て東京は上野で公演されたという事もなつかしい思い出である。尤

もその時私は七高在勤中で、ただただ、あこがれの心に充ち、心耳を以てのみきいたのであつた。それが今は全くポピュラーになつて、ラジオに於て公演に於て、レペルトアールの首位を占めるに至つたことを考え合せて転た今昔の念切り、楽壇諸氏の大なる努力に対して感謝の念切なるものがある。

パリに於ける数年の窮乏生活の後ヴァーグネルはドレーズデンに帰つて来た。此地に於ける彼の身には、その生涯に於ける幸運の微笑がほほ笑みかける様であつた。彼はウェーバーのオイリアンテの指揮を以て、丁度その頃死んだモルラツキの後任として王室指揮者の地位を得んことを求め遂にこれが獲得に成功した。それは彼三十一才の頃で俸給は年額千二百ターレル（三千六百マーク、使用価値は今のわが国の三四十万円か？これは私の推測であつて明瞭な計数ではない。モーツァルト、ベートーヴェンなどの収入に比べて大体比例はとれていと思ふ。）この時期に於ての彼の仕事としては「使徒の愛餐」その他小作品の完成、ベルリオーズの演奏に対して大に助力したこと、タンホイゼルの完成初演、ローエングリンの完成等があるが、彼の首唱によつてさきに英国で客死したウェーバーの遺骨をドレーズデンに還し戻した事及びこの第九の演奏が音楽史上忘るべからざる事実として牢記されるべきであらう。リストの大なる助けによつてベートーヴェン記念碑の建立にも成功した。

この頃は、入場券による一般演奏会というものは、ドイツ諸都市に於てもこれを行うことは困難であつた。ドレーズデンの王立楽団はそのオペラハウスと教会で演奏するだけであつたが、そこで年に一度寡婦と孤児とのために慈善音楽会を行うという定めがあつた。そしてその音楽会に於ては、オラトリオとシンフォニーとを演奏

することが習慣となつていた。その指揮には二人の王室附楽団指揮者が交互にこれに當ることになつていた。一八四六年に行わるべきそれに於ては、ライシガーがオラトリオを指揮し、ヴァーグネルがシンフォニーを指揮することになつたので、彼は第九をやるべく決心したのであつた。しかしこの事は楽団の演奏家たちを愕然たらしむるに充分であつた。彼等は委員を撰んで総監督フォン・ルティハウの許に送り、ヴァーグネルの考えているこの大胆な極悪、潰神な計画の実行をば阻止すべく、出来得べくんば総監督としての職権を發動して貰いたいとまで嘆願するに至つたのであつた。

ヴァーグネルのこの計画なるものはそんなに大胆危険なものであつたらうか？危険な要素なるものは抑も何処にあるのか？今から見れば理解も出来ない程な可笑しな事実であるが、当時としては所謂職業音楽家の大部分の間には此様な考えが圧倒的であつたし、この問いに対する答は、それは当時の音楽者たちの、更に指揮者批評家たちの―彼等は勿論その時も将来に於てもヴァーグネルのために断然として敵側に立つたのであるが―趣味、解釈の行動に対して、明確な著しい光りをなげかけてくれるわけでもある。

職業的音楽者の大部分を構成するところの守旧派の人々は、この時代に於ては、眞のベートヴェンらしきもの、云わば第三期の作品を理解するまでに進んではいながつた。今日楽団の大作と認められているところの此巨匠の第三期の作品は、当時に於ては暗黒な不自然な、云わば耳疾のために動かされていた精神の乱れとして理解されていたのであつた。その原因は楽曲そのものに於てよりもその解釈者、それはベートーヴェンの意図をも、またそれを表現にまで持来すべき方法に対しても何等の理解をもたなかつたところの、その人たちの間にこそ存し

ていたという事は、自然でもありません。要するに第九の実演という事は當時はドイツに於て極めて稀なる事であつた。ライシガーがその数年前にドレーズデンに於て演奏したとき、それは一般聴衆に對して何等の喜びをも満足をも与えなかつたし、指揮者自身もそれを当然なりとして認めていたのであつた。その結果として、この大曲もドレーズデンに於ては云わば評判のわるいものとして目されていたから、音楽者たちが慈善音楽会にこの大曲を出すことは、結局は入りが悪くなつて救恤の目的たる寡婦や孤兒やのために不利益を齎らすに至るであろうことを懼れたのは、極めて自然の事でもあつたのである。

それでもヴァークネルは恐れひるむ所はなかつた。少年時代に於て彼はその総譜をかなり深く研究していた。ライプツィヒのゲヴァントハウスでできた時、それが自分の所期に副わないものであるとして遺憾の意を表明してもいるし、十七才の時これをピアノ曲に編曲しようとして、ある出版者に向つて申出をしている事実もある。その後彼はハーベネックの指揮するそれをきいた時、それには彼も満足していた様である。そのためハーベネック自身も何度も試演を試みて倦む所を知らなかつたし、聴衆のある者もその成功に一役買つてゐるとも伝えられてゐる。それ故ヴァークネルは、今度の演奏計画に對して非常なる熱意と自信とを持つていたのであつたが、同時に彼はベートーヴェンの最大傑作が此処ドレーズデンに於て理解されないのは、その責めは寧ろ解説者の側に在りとの確信を持つていた。それ故彼はどうかして此大作をば一般民衆の間に浸透せしめんとし、ベートーヴェンの眞の天才意義をそのまこと、の光りに於て示すべく努力した。それ故彼は反対説には頑強に抵抗し、時々匿名で新聞に予告をなす等の事を試み、公衆の興味をこれに向けることに努めたのであつた。それから彼は解

説のための小文をものし、それを印刷して配付するまでの事をなしたのであるが、それがつまり彼の所謂解説プログラムの根底をなすものである。彼はまずこの作に於て表現されている感情のアナライズを試み、そのためにゲーテのファウストの中の適切な語句を借用し、これを極めて巧みに用いたのである。それが彼の全集第二巻に載録されているところの「ベートーヴェンの第九交響曲の演奏に就ての報告並びにそのためのプログラム」なるものである。

管絃楽部増強のためにライツイヒから諸声部を借りて来るまでの事をも敢てしたし、殊にこの曲の演奏効果を挙げるためには、合唱隊に於ての種々な難点をば理想的に解決し了せる事が先決要件である事を痛感し、ドライシツヒの合唱団シンクアカデミーによつて、ドレーズデン劇団本来の合唱団を増強する外に、特に児童の声を以て鳴るクロイツンユーレの合唱団及び宗教歌曲の訓練に於て名声高かりしドレーズデン・ゼミナリウムの合唱団をもちりて来て、総計三百名に上るものとした。これ等の合唱団に対して猛訓練を施す事によつて聴衆を眞の忘我狂喜の域にひき入れる事に成功した、と彼は云つている。あの有名な語句「幾千万の人々よ抱擁せよ」のところ、殊に「兄弟たちよ、星の蒼穹の上によき父は在し給う」のところは普遍の方法で歌つたのでは駄目である、非常最高の感激に於て、寧ろ怒鳴る位にやらなければいけないと教えてこれにも成功したと云つている。(バス声部に対して。) またバリトーン独唱の「友よ、これ等の音ではなく」のところは、特にむつかしいために殆んど歌い得ないとされていたところを、ミッデルウルツェルの力によつて、相互に信じ合い通じ合うところの内的交渉によつて、人々を恍惚たらしむるまでに成功した事は特に私にとつて大なる喜びをなしたと彼は云つている。更に彼はロカー

ルの根本的改造によつて、オーケストラの特別な音響効果を挙ぐるべく大に力を致した。その費用調達のために如何なる困難を持たねばならなかつたかは、同情ある諸人士の想像に任せる外はないが、管絃楽を中央に集結せしめ、それをば多勢の半劇場式にかなり強く上り行く席に坐つてゐるところの合唱隊をしてとりまかせる様にした。それは合唱の力強い効果を挙げしむるために非常に有効であつたし、同時に純器楽の楽章に於ては細心の注意をもつて配置されたる管絃楽部に大きな精細さとエネルギーを附与し得たと彼自ら述べてゐる。各声部に実演のための注意を自筆で書いてゐる事は申すまでもない。

それ等の苦心努力は充分に報いられた。<sup>ゲネラルプロベ</sup>公開試演に於て楽堂は参会者で充ち溢れた。純収入も予想以上の額に達し二千ターレル（三千円六千マーク、今の六十万円位か）に上つたといわれ、実演者たちもヴァーグナーの価値を充分に認めるようになり、将来は毎年の慈善興行のためにシンフォニー実演を行う様にと建言した。有名なデナマルクの作曲家ニルス・ガーデは彼に向つて、二倍の入場料を払つてもよいと宣言し、また言語学者ドクトル・ケヒリーは、この曲に、始めから終りまで充分な感情深き理解を以てつき従ひ得たのは今回が始めてであると云つた。所謂批評家たちは、予期された様に罵詈雑言を並べたし、彼の同僚ライシガーはヴァーグネルの成功を忌むの余り、この交響曲に対して奸策を延らし、公衆に対してベートヴェンの「憐れむべき昏迷」を指示するまでの愚挙をも敢てした。

彼が真剣に意志したところのものを完全に立派に成し遂げ得るだろうとの確信と力との感情が、この機会に於て自分の心の中に強まつたと告白しつつ、次に記す通りのプログラムなるものを彼は書いてゐるのである。

## プログラム

この驚くべき意義深き曲に対して、精細なるそして親しい理解にまでまだ到り得なかつた人が、始めてそれを聴くに際しては、その理解のために、大なる困難に出逢うであろうと考えるので、その様な状態にあるであろうと予想されるところの聴衆諸君の恐らく少なからざる部分の人々のために、ベートヴェンのこの傑作の、よしや完全なる理解にまでとは云えなくとも——それは直接自分の心からの内的観察と理解とからのみ生ずるものである——うから——少くともある示唆によつてこの曲のもつ芸術的構成の認識を容易くするために解説を試みようとの計畫は、恐らく私に許されてあるであろう。この曲の構成なるものは、その大きな特種性と全く真似の出来ないところの新らしさのために、準備不充分なる、従つて容易く混乱されやすい聴衆諸君にとつて、この種の困難が生ずるであろうとは極めて自然な事であると私は思う。さて解説の筆を採るに當つてまず第一に高尚なる器樂の本質は言葉で表現し得られぬものを音を以て表現するにあるのだという事が承認されねばならないならば、吾々は吾等の大詩人ゲーテの言葉をかりて來ることによつて、この到達し難い仕事の解決に、ただ暗示的にこれに近寄り得ると思うのである。そのゲーテの言葉なるものもベートーヴェンの作品と何等直接の關係に立つものではないから、この音樂的作品の意義を貫通的に解明する事は出来ないであろうが、それでもなお、その根底をなすところの高尚な人間の魂の氣分を莊嚴に表明しているから、全く理解が出来ないという最悪の場合に於ても恐らくこれ等氣分の的確なる把握によつて満足していただけるとは思ふのである、そしてこの大作をきいて、少く



とも何等の感動なしに立去つて行かねばならないという憂からは解放され得ると思うのである。(訳者註。ヴァーグネルの論文は一種独特な文体をもつていて、云わば、もつて廻つた様な云い廻しを常に用いているのであるが、その文体を伝えんがために、私のこの訳は大分直訳風になつてゐる。もつと平たくわかり易く訳す事も不可能ではないという事を心にとめて、読者諸君も適当に読んでいただきたい。)

## 第一楽章

われ等とこの世の幸福との間におかれたるところのあの敵対偉力の圧迫に対して、喜びをもがき求める人の偉大なる心を以て掴みとられる戦が、第一楽章の根底に存していると思われる。すぐ始めに、ぶ気味に何物かを被い隠している様な幕の中から、裸形でしかも強力に歩み出て来るところの第一主題をば、全曲の意味に應じてゲーテの次の言葉によつて表わされるとすることは敢て失当ではない、それはこの場合に於て極めて適当な表現であると思う。

「欠乏を忍べ、困苦に堪えよ」(一五四九行)

この強力な敵に対して吾々は一つの貴い反抗を認める。それは力強いエネルギーをもつて、二の楽章の中程まで、この敵に対しての明かな戦にまで上昇する。そこに吾等は二人の強い闘士を見る様に思うのであるが、双方共、互に負かされたとは思わないで、一先ず戦場から去つて行く。ばらばらに笑みかけて来る光りの姿の中に、甘い悲しげな幸福の微笑を認め得る様に思う。その幸福の微笑は吾等を捜し求めている様であり、吾等もそれを

擲もうとしてもがき苦しみもするが、それに到達するかと見える刹那に於て、あの意地わるの力強い敵がその夜暗の様な翼をもつて吾等を包む様にして吾等の進みをくいとめる。それであの遠き恩寵を打見やる吾等の眼ざしも曇らされ、吾等は暗い憂鬱に沈むが、それはまた再びさきの喜びを奪い行く悪鬼に対して新しい格闘にまで立ち上がる。その様にして威力と反抗、奮闘と憧憬、殆んど得られそうな望みが浮び出るが、またもやすぐに消え失せる。又もや求め又もや戦う。それ等の双方の飽くなき戦がこの偉大なる曲の休みな動きの要素をなす、それは幾度も繰り返されている中に、遂に一方がまけて全く喜びなき状態に陥り、そしてその様な有様が度々永く続く、その状況をゲーテは次の言葉で表わしている。

「毎朝起きる時からもう困苦欠乏だ（一五五四行）」

日の目を見てもその日は

ただ一つの願望をさえ叶えてはくれぬ。

自分は苦い涙を呑んで泣きたいのだ。

未来の快樂を想像するだけの願望でも、

もうわがままな世間のあらさがしにぶちこわされる。

折角胸に湧き立つ創造でも、

数知れぬ人生の醜分子に妨げられる。

夜になる寝る時でも

びくびくして床に就かなければならない。

ねても安息は与えられず

いやな夢に驚かされる。」(二五六五行)

この楽章の終りでこの暗い喜びなき気分が、巨人的偉大さにまで膨脹して全宇宙を包括する様に見える。そして結局は恐ろしく壮嚴なる威嚴をもつてこの世界——それは神が喜びのために創り給いしとこのこの世をば、わがものとして領有せんとの意志の表白がこの楽章の終末をなす。

## 第二楽章

第二楽章の始めのリズムをもつて、荒々しい意欲が吾等をつかむ。われ等が今、入り込んで行くこの新しい世界、そこで吾等は狂喜にまで引きずられて行き遂には失神状態にまでなる。われ等は絶望にかられてこの新しい世界から逃れ行こうとするかの様である。しかも休みなき努力に於て新しい未だ知られざる幸福を贏ちとらんとして追求の足をゆるめない、かつては遠き微笑をもつて吾等を輝き照らしてくれたその日の幸福は、吾々から全く遠ざけられ失われてしまった様であるから。ゲートはこの渴仰的気分を次の言葉で表わしている。この言葉はその気分をば極めに適切に表白しているものと私は思うのである。

「君に云うた筈だが、歓楽が問題ではないのだ。(一七六四行)

あの苦痛に満ちた享樂のよろめきに、

恋しき憎悪と爽かな憤懣に身を捧げたい。(一七六六行)

願くば官能の深みに沈潜して、(一七五〇行)

燃えあがる情熱を静めさせてくれ。

見通しもつかない神秘の蔽いの下に、

あらゆる不思議が現ずるとよい。

時のざわめく流れの中へ、

開いて展べる事象の中へ飛込もう。

そうして、苦痛も、享樂も、

成功も、不快も、

欲するが儘に替る替るやつて来るがよい。

男児はただむやみなく活動するものだ。(一七五九行)

中間章が急に入り込んでくるところで、この世の楽しみと自己満足的な愉悅のあの場景の一つが、突然とわれ等の前に開ける。ある種の粗野な喜びか、この簡単なしかも度々繰返えされるところのテーマの中に表白されている様である。云わば素朴なお人よし気分、自己満足的な快活さである。そこで私はゲーテがこの様な粗野な愉快さを現わすために云つたあの言葉を借用して見たい気になるのである。

「この連中は、毎日が祭日なんです。」

才は拙なれど、楽多しという寸法で

小さな圈わをかいてぐるぐる踊り廻る。」(二二六三行)

しかしこの様な狭く限られた快活をば、われ等の眞の幸福、及び、いとも貴かるべき喜びへのその休みなき追求の目標として承認する気にはなりきれない。この場景を眺めるわれ等の眼は曇つて来る。吾等はそこから目を転じて改めてあの休みなき急迫に身を委せる。それは吾々をば絶望の逼迫をもつてまた再び休みなく前方に追いやる、そしてそんな容易い気分では到底かち得られないであろうところの幸福を握みとるべしと教える。かくして吾々はこの楽章の終に於て、再びまた曾てかち得たところの安価な愉悅の場景に向つて追いまくられるが、今度は、吾々はそれを見とめるや否や直に、急いでしかも不快な気分をもつてつき離すのである。

### 第三 楽章

第三楽章の始めの音は、吾等の心に向つて全くちがつた気分をば語りかける。それ等の音は全く純清、いや高き御空から天降り来し貴き響の如く、なだめるが様に反抗を和らげ、絶望によつて望みなきまでにしめつけられたる心の荒き逼迫を柔かい悲しげな感情にまで解きはごす、それは以前に吾等が享受し得たる純粹なる幸福への追憶が再びさめて来るかの様である。

「かつては、厳肅な安息日の静安の中に、(七七一行)

天上の愛が雨のように俺に降りかかった。

その時鐘の音は望みに胸を躍らせる様に鳴渡り、

そして祈禱が、俺の熱烈な享樂であつたのだ。」（七七四行）

この追憶と共にまた再びあの甘美なる憧憬が吾等に襲いかかる。それはこの楽章の第二主題の中に美しく表わされているが、ここにまたゲーテの言葉を据え置いて見る事も極めて適切であろうと思ふのである。

「口には云えぬ優しい憧憬に駆られて（七七五行）

森や牧場を歩きまわり、

無量の熱涙に咽びつつ、

俺のために、一箇の世界が現出するのを感じたものだ。」（七七八行）

それは愛の憧憬の如くに見える。それに対してまた再び表情の感動的な飾りの中に、あの望みを約束しつつ、甘美なる安息を与えるところの第一主題が答える。そして第二主題がまた帰つて来るところで愛と望みとが手を組み合わせてその温和な力をわれ等の苦しみさいなまれたる情操の上に注ぎかけんとする如くである。

天上の響よ。何故なれば強くまたやさしく、（七六二行）

俺をこの塵の世に求めようとするのか。

心の柔かな人人のほとりを響き廻るがよい（七六四行）

びくびく顫動する心がおだやかに反抗しつつこのやさしい力をば遠ざげようとするかに見える。しかしこの甘い力はわれ等の反抗（それは既に和らげられてもいるが）よりもより大きくある。吾々は遂にそれに屈して、こ

の純粹なる幸福の恵み深き使者の腕の中に身を投げ入れる。

「おお、響き渡れ。甘美な天上の歌よ。

涙が湧き出る。俺は再び地上のものとなつたわい。」（七八三行）

傷ついた心が恢復し、力づけられ、元氣な昂揚にまで高められ行く様に見える。それを吾々はこの楽章の終りまでつづくところの、殆んど勝利の凱旋の様な進みの中に認める様に思う。しかしこの心の昂揚も曾て体験させられたる嵐の反動から解放されてはいない。古い悩みが又も襲いかかつて来る度毎に、あの幸福を約束するところの魅力ある力が新たに、なだめ和げる様に押し迫り来る、そしてその力の前に、最後には荒れ狂いよる嵐もくだけで、稲妻の消え行く様に消えて行く。

#### 第 四 楽 章

燃ゆる喚声の如く始まるところの第四楽章への移り行きは、次のゲートの言葉によつてかなり明かに示されていると私は思う。

「ああ、最善の意思があるに拘わらず、

俺の胸からはもう満足は湧いて来ない。」（一二二一行）

「何という壯観だ。が、しかし一箇の見せ物にすぎぬ（四五四行）

無限なる自然よ、俺は汝の何処をつかもう。

何処で乳房をつかもう。汝一切の生の泉よ、

天も地も懸かつて存し、枯れしなびたこの胸の慕いよる泉よ、汝は湧き出て、

人に飲ませるのに、俺は徒に渴に苦しむのか。(四五九行)

この終楽章の始まりの処でベートーヴェンの音楽は断然たる明かな性格をとる。今までかたことつて来たところの純器楽の性格、それは無限のそして断然たらざる表現の中にあるのであるが、その性格はすてられる。ここでこの音楽詩の進行は断然たる決定に向つて迫る、その断定こそはただ人の言葉に於てこそ表わされるのである。ヴァーグネルが言葉と人声を入り込ませる事、それをば一つの当然かくならねばならぬところの必然性として低音楽器のこの恐ろしいレツィタティーフをもつて準備させている事、それが絶対音楽の制限を最早や捨ててしまつて、感情に充ちた強い力をもつて、決断を迫りつつ向い進み行くところ、そして遂にそれが歌のテーマにまで移り行き、しかもそれが単純なそして荘麗な喜びの中に動き行く流をなして他の全楽器を引き従え、かくして偉大な高さにまで膨れ増して行くところをきいて、吾等はただ恐嘆するばかりである。それは器楽だけの力によつて、たしかな区劃のはつきりした、そして濁らされていない清純な喜びを表現しようとする最後の試みである様に見える。しかし制御しきれぬところの要素がこの制限には堪えきれぬ様に見える。狂瀾怒濤の様に泡立ち上つてはまた静まる。荒き混沌たる無秩序の絶叫、それは熱情が満足されぬ事から来るのであるが、それが前よりも更に強くわれ等の耳に迫り来る。そこに一つの人声が、言葉の清澄にして明快なる表現をもつての人の声が楽器の荒れ狂う響きに対立して出て来る。彼がこの声をもつて凡ての楽器に向つてよびかけるのを吾々がきく時、そ



ここにこの偉大なる作家の大胆なる靈感を見るか、それとも作者の純朴無邪気さを汲み取るべきか、何れがよいかと思ひ惑うばかりである。

「汝等親しき友どちよ、この音をやめよ！」

より愉快な喜び多かる歌を歌いはじめよ。」

この言葉をもつて混沌の中が明るくなる。はつきりした明瞭な表現が得られる。その中に吾々は器楽の所定の要素の土台の上に、喜びを求めてもがき苦しむ努力に対して、かたく把持さるべき最高の幸福として表われてくるにちがいないと思ふそのものをば、清く明かにきくことができるのである。

「喜びよ、美わしき神々の火花よ

楽園に生れしわが少女よ

われ等は燃ゆる如き情熱に酔い

天の少女よ、汝の聖なる殿堂に入る。

この世の時好が厭に分かちたるものを

汝の魅方は、いまや再び結び合はずよ。

汝のやさしき翼がやすらうところに

凡ての人々は同胞はらからとならん。

第九交響曲とファウスト

一人の友の友たるべく

大なる思いをなし遂げ得し人

貴とき親しき妻をかち得たる人は

来りて共によるこべよ！

やよ、ただ一つの心をば

この世にわがものと呼び得るものよ！

それをしもなし得ざる者は

なげきつつ、このまといよりさかり行け！

凡ての生とし生ける者は

自然の胸に喜びを飲む

善なる者も、はた悪しき者も

ばらの足あとに従い行く

自然はわれ等に接吻と葡萄樹と

刎頸の友とを与えたり

蛆虫め等には空しき快樂を与えたり

火剣をもてるケルプ天使は神の御前に在り。」

元気のいい戦闘的な響きが近づいて来る。若者の一群れがこちらへと進み来るを見る。彼等の喜ばしい英雄的情操は次の言葉にあらわされている。

「天体の崇高なる運行の中を

そのの諸星が天翔り行く如く

同胞よ、汝等の道を進み行け

勝利へと進み行く英雄の如く喜び勇みて。」

これが器楽のみによつて表わされたる勝利の戦にまで進み行く。若人たちが勢よく戦場に突入し行く状勢をわれ等は見ると、その戦果は喜びでこそあるべきである。そしてここにまた私はゲーテの言葉を引用せざるを得なくなるのである。

「自由と生活とは、日々之を獲得するものにして

始めて之を味う権利あり。」

吾々が疑わなかつたところの勝利は遂に勝ちとられたのである。力のあらゆる努力が喜びの微笑によつて報われる。それは新しく獲られたる幸福を意識しつつ、歓呼の声をなして破れ出る。

「喜びよ、美わしき神々の火花よ

楽園よりの少女よ

われ等は燃ゆる如き情熱に酔い

御空にいます少女よ、汝の聖なる殿堂に入る。

この世の嗜好が嚴に分かちたるそのものを

汝の魅力は、いまやそれを結び合わすよ。

汝のやさしき翼がやすらうところに

凡ての人々は同胞はらからとならん。」

歎喜の高調に於て広き一般の人類愛の表情が高くも溢れたぎつ胸から迸り出る。莊嚴なる感激に於て吾等は全人類の抱擁から宇宙の創造主に向つて眼をあげる、その惠深き存在を吾等は明かに意識の中に歎声をもつて迎え、その姿を吾等は壯嚴なる忘我の瞬間に於て、分れ行く青き瀨氣の中に見る様に思うのである。

「幾千万の人々よ、抱擁せよ！」

全世界の人々の接吻を！

同胞はらからよ、かの星空の幕屋の上に

われ等の父なる神は在さん。

「幾千万の人々よ、汝等ひれ伏すや？」

世界よ、汝はおぼろげに創造主を感じるや？

さらば星空の幕屋の上にそを求めよ！

星座の上にこそ創造主は在し給うが故に。」

あらゆる人間は歓喜のために創られてある。いまや吾々は黙示によつてこの恵みある信念にまで達し得たかの如くである。力強い確信に於て吾等は互に叫び歡び合はう。

「幾千万の人々よ、抱擁せよ！」

全世界のこの接吻を。

喜びよ、美しき神々の火花よ

榮園に生れしわが少女よ

われ等は燃ゆる如き情熱に酔い

天の少女よ、汝の聖なる殿堂に入る。」

何となれば神によつて授けられたる全人類愛と手をつなぎ合つてこそ、吾々は清純なる喜びを享ける事が出来るのである。いとも壯嚴なる畏敬をもつて、しかもただそれを眺めるだけではなしに、われ等に黙示せられたる、吾々を甘美に幸ならしめてくれるところの真理の表情に於て、吾等は次の如く問い、

幾千万の人々よ、ひれ伏すや？

世界よ、汝は創造主を醜氣に感ずるや？」

そしてそれに対して

「星天の幕屋の上に彼を求めよ

第九交響曲とファウスト

同胞よ星座の上にぞ、

一人の親愛なる父は在し給うが故に。

答え得るのである。

与えられたる幸福をうれしく把持しつつ、歓喜に対する無邪気な子供らしい心をもつて、われ等はその享受に身を捧げる。心の無邪気さが吾等に再び与えられ、喜びのやさしい翼が吾等の上にひろげられる。そしてこのおだやかなる喜びの幸福につづいて激しい喚声が起る。かくて吾等は世界をわが胸にいだく。歓呼の声が大洋の激浪の如く空をみだし、永遠に動き、恵み深き震撼に於てわが世を賑わす。吾等人間がこの世で幸福であるべき様に神が与え給いしところの全人類の喜びを保ちつづける。

「同胞よ、星空の上にぞ

一人の親愛なる父が在し給うが故に！

喜びよ、喜びよ、美しき神々の火花よ！」

ヴァーグナーの解説はこれで終つてゐる。しかし彼が利用し挙げ用いたファウストの語句が全部中のどこにあり、如何なる情景の中に如何なる意味で用いられているかを説明することが必要と思われるから、そのために数葉をささげる事をお許し願いたい。それはファウスト一部の、しかもその前半からだけである。

## 第一章解説のための語句

この語句は書齋第二の場からかり来れるものである。場面は勿論第一と同じであるが、そこにいるファウストの気分は全く異つてゐる。第一の場の始めでは、彼の胸の中はすっかり清々しくなつていたのに、此処ではまた復活祭前夜の様な憂鬱な気分になつてゐる。その夜、彼は書物と実験道具の雑然たる堆積のに、机に凭つて不安気な面色を見せてゐる。疲れた眼を以てゴシック式円天井の穹窿を見上げてゐる。彼は自分が今まで成し遂げて来たこと、考えもし努力もして来た事を回顧して見て、しかもそこには、自分の努力して来た事の何物も遂げられていない事を感じてゐる。彼の今までの生活は全く無為であつた。何等の目的もなく内容もないものであつた。この気分をば彼は「何も知り得ない事は判然分つて来た。」(三六四行)の一語で表わしてゐる。知らないだけではない、知り得ないのである。知らないだけなら、まだ我慢もできる。何とかして知識を増益し、補足し、またこれを深める事も出来よう。しかし、何も知る事が出来ない事が判然したとなつては、学者としての彼の任務は万事休すである。彼は今までの来し方、学的労作を回顧して見て、結局人間は事物の表面のみをまさぐつてゐるのだという事が分つて来た。沢山の事実を徒にかき集めて見たところで、それは何等吾々を向上させてはくれない。物を知るだけであつて如何を知る事は出来ない。何の為に、何故に事物がそうなつてゐるのかについて答えて得てこそ始めて「吾等は世界を知る」と云い得るのである。それでこそ始めて事物の深み、核心を掴み得たと云えるであろう。彼は絶望のあげく魔法に身を委ねる。「世界をばその深奥から統一するものの本体を見究め、

一切の活力と種原とを觀照し來つて、無益な言論を弄したり、空な言葉に拘らわされるの愚を演ずる様な事のため」に魔法に身を捧げようとする。それは青年の倨傲な慢心ではない、それは凡俗を喜ばすだけの学問の上つらをとび越えて人知の深奥に入り込もうとの念願をもつて、永の年月をまじめに努力して來たところの老学者の苦み多き体験である。埃まみれの書冊とレトルトの中で過ごされた数十年はこの老学者の心を弱め消してはいなかつた。「月光に浴して靈たちと共に漂い、一切知識の閑葛藤を放下し、汝の露に浴してこの身を蘇りたい」という言葉の中には元氣な若人の血が脈搏つているのを感じる。そこで彼は魔法の秘書を開いて大天地の符を凝視する。それで一時その願望も充たされたかに見えたが、それはあまりに偉大に過ぎて捉え処がない。そこで次には地靈を呼び出す。それは天上に対しての地上を支配する靈であり、自然生活のその大なる総体の人格化である。しかし人間の眼はこの純絶對者を見るには堪えない。彼はそこで眼をそらして彼が永くあこがれ望んでいたものから眼を離す。限りあるものとしての人間は純絶對の眞実から見つめられるには堪えきれない。多くの、暗くなし弱めるところの中間物を通して、しかも僅の瞬間だけ、その眞実は姿を現わしてくれるのである。要するに人間は自然生活の総体の中のただ一部に過ぎない、地靈の一部であるから本質上同位に位するが、ファウストはこれを知ることには出来ない。「お前はお前の考えている靈に似ているのだ。俺には似ていない。」その差違は質の上にはなく、量の上にある。吾々はその本質から見れば地靈を理解し得るわけである。凡ての子供はその父と質を同じうするから。しかしこの父はどの子に比しても無限により大きいから、この質の上の類似は量の類似に對して對抗は出来ない。質が似ているからそれを見得るとファウストが思つたのは正しいが、箇々の物を物の物



から分つところの量と力の点に於ての無限の差を飛び越えようと思つたのは誤りである（フィッシャーによる）。この場合のファウストの心的経過を綜括すれば、極度の偉大の前の萎縮、勇敢にこれに対することによつて生ずる同化と高揚、そして久しく高きに立つに堪えざる墜落である。最後に雷鳴の様な声が、憐れなファウストをひき浚つて、不安な人生の運命の筈へ突き落す、そしてこの体験は永くファウストを支配する。そこへヴァーグネルという平凡な勤勉な弟子が現われる。

ヴァーグネルは深夜に寝帽子を被つて、手に燭をもつて現われる。彼はファウストの心の底から迸り出る独白を、翌日講堂に於ける準備のためのギリシア悲劇の暗誦と思つて、何か得る所あろうとして来たのである。ヴァーグネルは到底ファウストの心事を理解することは出来ない。二人の間には学問や知識の意義に関する興味の深い対話が行われるが両者の気持は全くチグハグである。ヴァーグネルは乾燥無味な、疲れを知らぬまでに勉強な黙つて考に耽りもする良心的な誇学者であり、どの国の大学にも見られる通りの学者型である。この種の人とファウストの如き火熱をもつての努力者との対照は真に面白さの骨頂である。ヴァーグネルと雖も一概に可笑しな人物として軽蔑さるべき者でもあるまい。そのまじめさは買つてやつてもよいであらうし、その勉強の仕方それ自身としては価値もあり、学者にとつては是非とも必要なものであるとも云い得る。しかしそれが滑稽に見えるのは、彼があまりに偉大なる超人の前に立つていて、その隔りがあまりに大きすぎる事から来るのであらう。ローゼンクランツはヴァーグネルを評して次の如く云つている。「彼は製本布と紙との有難い映像であり、乾燥無味な経験論者である。知識の増蕃をのみつとめる学者であり、真剣な賢者ではあるが、その憐れな研究に没頭

し、その制限の中に安住の地を見出している。この種の人々は倦む処を知らずに勉強するが、真の知識には到達しない。彼等は財宝をさがし求めてあちこち掘りかえして、しかも蚯蚓を掘りあてればそれで満足している。彼等は自分で考え出し発見することが出来ないから、外から何かを掻き集めようとする。かくして彼等の前に開かれる貴い計画は彼等のために全天を降り来らしめんかの様に見える。この学僕先生はファウストがギリシア悲劇の朗読をやっているのだと思つて、自分も亦何かご利益に預かるうと思つて、潜むが如くに師ファウストの室に忍び込んで来る。その勉強とその狭さに於て滑稽的人物ではあるが、彼等が思い上つて、学問芸術をば自己の天才的生産に於てわがものとなしたと思ひ、自分のやつて来た小さな蒐集を真の研究の本質なりと云ひ触らすに至つては正に唾棄すべきである。この種の人々は今でも沢山ある。彼はローマ、パリに行つて古代ドイツ語や東洋語などをやつて古文書を写して来てはそれに立派な装釘を施し、自分は劃世的な仕事を完成したと思つているのである。」(これは本論には直接関係はないが、その皮肉な表現を面白いと思つて一寸挿入して見たのである。私自身がやつて来た事はこのヴァーグネルの仕事にも及ばないと思つて些か恥ずかしくも思つている。)

ヴァーグネルが去り行つた後に、所謂第二独白があるが、これこそ考察熟慮の深さを示すものとして極めて重要視されている。その根本思想は第一独白と同じであり、同じ不満と絶望感とを表白してはいるが、よく考えてみるとその根基をなす気分は第一独白とは全くちがつている事を認める。ファウストが第一独白に於ては個人的な悲しい運命として体験して来たものが、ここでは全人間の運命として表白されている。彼の個人的運命がここでは人間一般の運命となり世界運命となつている。この見地から吾等は既におなじみになつているところの彼の

思想をば改めて思い見る必要があるのである。

ファウストは先きは地霊の一喝によつて非常な絶望感に陥つたが、ヴァーグネルに比べると遙かに優れていることを自覚して、地霊の前に侏儒の如く感じてそれによつて起された絶望から恢復して、一応ヴァーグネルに感謝する。しかしまた独りになつてさきの事を追懐すると、また新たな更に強い絶望感に襲われ、遂に自殺を決意するまでに至るのである。

「これからは誰に教えを仰ごう。どうして去就を安めよう」(六三〇行)と無邪気な一学生のような問を起す。「神の形像さながらの俺は、永遠の真理をうつす鏡に近ずいたと思ひこみ、地上の子たる人間性を蟬脱して、天の光明と清澄の中に自己を味うていた。光焰天使をも凌ぐ俺は、自在の力を揮うて、自然の脈管の中を貫き流れ、創造しながら、神々の生を享樂しようと、非望に胸を躍らせたのに、この罰せられ様は如何だ。雷霆の如き一言にはね飛ばされたのだ。―ああ、吾々の為す事業その物も、吾々の受ける苦難諸共に、生の進路の障礙となるわい。心霊が受けた極めて美しいものにさえ、縁もゆかりもないものが混つて来る。世の中の善事を成就して行手を見れば、その上の善事は虚罔な妄想だと云われる。吾々に生命を与えてくれた美しい感情も、擾々たる塵土の中にあつては凝固してしまう。(六一四―六二二行―六三二―六三九行)(註、「神の形像さながらの俺」とは活動が神に似ているの意。「永遠の真理の鏡」とは「純なる直観、即、外物に妨げられずに事物の真相を目撃すること。光焰<sup>ケルプ</sup>天使は第二階段の天使であるが、神に仕えて受働的の仕事をしている。神の活動に似た自主自由の活動を夢想しているファウストはケルプより偉いと思つている。ファウスト最高の目標は創造することにある。その

あとファウストは、人間の事業は失敗しても成功しても結局それは活動の進路を阻止するものなることを頗る悲觀的に述べる。「縁なきものが混つて来る」は「精神活動には段々疎遠になる物質が固着する、つまり人間の事業には精神と物質との間に矛盾衝突がある」とのことを示している。「この世の善いもの」は「此世の財宝」。「よりよきもの」とは「それ以上の財貨を超越して世界の真相を看破せんとする努力」を意味する。「吾々に生命を与える吾々の精神に活気を与える最も優わしい感じ」とは理想を意味する。ここには理想と現実とが悲觀的に述べてあるが、シラーの「理想と現実」には樂觀的に述べてある事は大に注意する価値がある。

われ等の人間運命の特性は何処にあるのであろうか？それは先ず第一に凡ての大なるもの、美しきもの、貴いもの、それが人間の心の中に萌えて世界に於てそれが実現されそうになると、すぐに物質と大衆との側からの反抗にぶつかる。そして世界の最偉大な最崇高なものは血を以て購われたではないか？全人類の為に恵めの泉であつた者、同胞のために新しき偉大なるものを告げ知らせようとしたものは――キリスト、フッス、ゾルダノ・ブルーノーみな磔刑、火刑にされているではないか。抑もそれは何から来るのであるか？大衆と物質との怠惰性が新らしきものに反対するからである。

大衆の怠惰と鈍感の上に更に各個人独自の怠惰と安逸が加はつて人生を救うべからざるものとなす。人々は進もうとは思わない。流に逆つて泳ぐよりそれに従つて流されている方が安逸である事は云ふまでもない。現在ある善きものそれは勿論善ではあるうがそこに新たに実行せらるべきよりよきものへの向上を阻止するものがあるならば、それは此世に於ける最悲しむべきことである。善なるが故によりよきものを認めず自己以外の何もの

も堪えんとの雅量がなく、凡てを排斥せんと欲するならば最早それは善ではなく悪に墮してゐるものである。「世の中の善事を成就して行手を見れば其上の善事は虚罔だと云はれる」(六三六—七)。加ふるに他人の嘲笑が加はつて愈々人を怯懦ならしめる。それ等の力のうち最大な最危険なものは「憂」である。若し人が明日の為の憂によつて鉄の鎖を以て地上に縛せられてゐるならば高きに昇らんとすの魂の飛躍を誰が要求する等が出来よう？「お前はそれ等の襲うても来ないものに恐れをなし失いもせぬものを惜しみ泣かねばならぬ」。人間に憐れな人間たるの極印を捺し、動物からも神からも同じ様に遠ざけ、あらゆる向上の志望を麻痺させるものはその憂である。曾てはどんな「恐怖にも疑惑」(三六八)にもめげなかつたファウスト自身を「憂」の幻影が厳しく苦しめる。彼は最早鬱勃たる覇気に燃える個性ではない。憐れむべき人間の一代表者に過ぎない。人生を征服し超越せんとすの力強さは彼のどこにも求められ得ない。彼は彼の不純に於て情性に於て、精神的なものの中へ物質の穢れを加え、活々しい感情の湧き出る泉を現世の行蔵の砂の中に枯渴せしめそうな傾向に於て、生そのものを恐れてゐる。「神々に似もつかぬことをいよいよ胸に徹して感じてゐる」(六五二)。憐れな虫けらとして塵芥に身を肥して生を偷んでゐるうちに道行く人の足に踏まれて殺されて埋められるのだ。ファウストの気分は遂にかういふ結論に到達する。吾等の思考と意欲の内容は清明境にはない。吾等は盲目に、無自覚に、ただ情熱と衝動に追いまくられて、あちこちに蹒跚としてよろめき歩いているのだ。吾等がそれによつて世界と人生との暗さを通して途を開いて行こうとするところの知識や手段も、吾等が今日誇りとしているところの自然科学の実験、われ等がそれをもつて自然を制御しようとしてゐるところの諸機械、それ等は果して自分のなすべき仕事を尽してくれてい

るだろうか？吾々が知りたいと願っている事を、この様な途に於ては到底達し得ないであろう事を吾々はいよいよ強く痛感する。自然はその覆面の被を剥がさせはしない、吾々の知識の狭少さ、吾々の認識手段の窮乏、吾々の意志の力なさ、それが吾等の運命である。彼が自分について、更にもつと強く人間一般について、自分は塵の中を掘り廻る蛆虫に似ていて、神には似ていないのだとの事を嘆くのは尤もである。この様な思いが圧倒的になつて来たファウストにとつて、然らば何の為に真理への消ゆることなき努力が吾等の心の中に生きているかという問題が苦しくも彼の心の上に燃え立つ。さらば、父から受けたこの僅なものを無にしてしまふ方が、遙かに賢いのではあるまいか？かくて、この心の底を揺り動かすばかりの、この体験から自殺の決意が必然的に生じ来つた事の筋道が明瞭になつて来る。それは最早や暗い意識から生じた物ではない、明かな、充分意識せる知性と静かな断然たる意志とから出たものである。おのれの終りをなそうとの欲望から生じた絶望の行為ではない、それよりは、より高くより多くのものである。それはファウストの全人格として吾々が承認して来たところの、無限への超人的意欲の表現である。ファウストは、今や快活な気分で自分が求めている所の死は、事の終りを意味するのではない、無限と自分とを遮てるところのその門を開く事である事を確信している。この制限せられたる、此世の生活の後に新しい日が開けて来る。それは彼をば、純なる濁りなき、妨げるものなき活動の新しい世界へ導いてくれるであろう。彼が此世に於て制限とし抑圧として感じて来たものが、彼が魂の覆い物なる肉体をなげすめたその刹那に於て、凡そ彼自身から離れ落ちる。精神は自由になり、新しい世界に舞い上り、自由に制圧されるものなく思ひの儘に活動する事が出来るであろうとの確信に彼は到達したのである。

この明澄な決心をもつて彼は毒杯をとる。その瞬間に突然と復活祭の鐘の音と合唱歌がきこえて来る。それが彼の手を妨げる、彼は手をやめて傾聴する、幼年時代青年時代の美しい思い出の数々が浮び出る、それが主の復活の悦びの荘嚴な気分と一つになつて彼の心に迫る。若き日の思い出が溢れるままに心の中に蘇るのを、彼はどうする事も出来ない。理性の自己崩壊と空虚な冥想をまだ体験することのなかつたあの幸福な時代。熱くたぎち落つる千行の涙の下に高い希望と貴い憧憬の世界を夢に描き得た時代。それ等のさまざまの姿が明かに心の中に蘇つて来る。「涙が流れ落つる、俺はまた此世の人となつたわい」と告白せざるを得なくなつて来る。そこでヴァーグネルを伴つて郊外散歩に出る。彼は民衆の罪なき歎楽を眺め、美しき丘へ登つて懐旧の情に耽つている中に、春の日も暮れて行くのでまた書齋に戻つて来る。これが書齋第一の場である。彼は今し折角得た精神の安静を持続する手段として、ヨハネ福音書を繙いて、凡ての存在の源泉を意味するロゴスという語を翻譯するべくいろいろ考えている中に、後を追つてついで来た老犬が暴れ廻る。彼はそこで悪魔を脅かす基督の象徴を突附けると、メフィストが遍歴学生の扮装をして現われる。それが自己紹介などやつた後で眠り歌でファウストを眠り込ませる。それから所謂書齋第二の場で、第一楽章の説明のために引用されているのは、ここでファウストの云う言葉なのである。

書齋第二の場ではファウストは再び憂鬱な気分になつている。その云う所も始めの夜の場に於けると同じである。メフィストはスペイン風の派手な貴公子の風をして這入つて来る。赤い上衣には金の刺繡がしてある。上に羽織つたのはごわごわする絹の外套で、それに鳥の羽をさした帽子。(これだけが悪魔のしるし、他は凡てサロン

紳士の服装である) 長い尖つた劔、その外に彼は赤い外套を手に持つている。赤は地獄の色であり悪魔の好む色である。この様な服装をして自由な人生の享樂に出て行けと勧める。しかしファウストの体感している狭い地上の生活の苦は着物を変えた位で逃れられる程浅いものではない。それは人間存在の希望なき不満足である。単にあれやこれやの個人的な絶望ではない。人間は限りある制限の下に生きているものである、肉体によつて空間の一定処に縛りつけられ、意志に於ても行動に於ても独立性がなく力ないものである。その全力を働かせようと思えば必ず制限にぶつかると。しかも一面には、知識欲と享樂と行動とに於ての無限の活動に対して抑え難き向上慾をもつている。この気分からファウストが、人間存在の意義内容を「困苦欠乏」の一語に総括したのであることを吾々は理解すべきである。あらゆる日々毎日が吾等の願望の断念を要求する。吾々の胸の中の神は外に対して何等物を動かす力はない。この事を意識せる瞬間に於て彼は悪魔に身を委せたのであつて、これから愈々あの契約の場になるのである。これはゲートルが実際にいやという程体験した事であつて、しかも彼はこの命令を喜んで立派に完成しているのである。

## 第二楽章解説のための語句

ここに引用されている句「歓樂が問題ではないのだ。あの苦痛に満ちた享樂のよろめきに」は、ファウストが悪魔と賭をしたあとで云う言葉、彼が新生活涯を始める目的はあながち浮世の歓樂を味おうとするのみではない。世界中のありとあらゆる苦樂を味つて自我をば人類全体の我に拡張しようとする願望を表白している。ここには



オキシモロン  
反対成句が用いられている。ファウストにとつては、悲しみを伴わない楽しみが此世にあるとは思われないが、メ  
フィストの解釈を以てすれば、享樂とは楽しみだけをとり出して、苦痛の方からは逃れ行く事を意味する。愛らし  
い憎しみ、喜ばしい不快は何れもよろめきである。

次の句はこれの直前に述べられてあるもの、ファウストの云わば自己反省である。証書など不要とは思うが、  
先ずこれを渡してから、何で悪魔と結び付くに至つたかを説明し、自分の良心に対して申訳をする。宇宙を総括  
する自然の秘密を探ろうとして、自分が地霊の階級に属すると思つたのは非常に僭越至極の沙汰であつた。ファ  
ウストは今メフィストとの結合によつて、思いを無尽なる享樂に向けるより外に途はないのである。しかも享  
樂生活への屈從に反抗する勇らしい自由な精神がまだ残つていて、それが生の流れと事業の嵐の中に活動して止  
まぬ様に、自分は「時の早瀬の中に、事件の推移の中に身を投げよう。痛苦と受用と成就と懊惱とが、あらん限  
りの交錯をなしてくる」その中で思う存分活動して見よう。努力は乱れているが、力は充分もつている。「男子は  
小息みなく活動するものだ」という。そのことを悪魔的に解釈すれば、到る処に首を突込んであらゆるものを享  
樂する事となる。ファウストはこの考を是正すべく「欲樂が問題ではないのだ」と教えているのである。

三番目の句は、「アウエルバッハの土窖」で学生たち酔いしれて騒いでいる処へファウストをつれて来て、メフ  
ィストが新生活への指導として、此処に見出さるべき新しい光を強調するときの言葉である。別に説明は要しな  
いであろう。

## 第三章解説のための語句

合唱の声をきいて毒杯を口からすてた時の言葉、天使や女達の群の合唱による神の愛の福音の知らせは、強くやさしく、彼の胸の琴線をうつつて、その琴線は、奇しきあやしき、口に述べがたいハルモニ―に於て美しく鳴り響かされている。教会の鐘の音が、彼の心の中の宗教感情をときほぐしたから、そして基督教的信仰が、春の思いの豊かな幸福と、凡ての生物、全創造の目ざめに対する恵み多き希望と、一つになつてとけ込んだから、それで敬虔な幼少時代の時代の追憶がさめるのである。「祈禱が俺の熱烈な享樂であつたのだ」はゲーテ自身の幼年時代の追懐である。ゲーテが病氣中、信心深いクレッテンベルク嬢に依つて喚起された宗教心がこの句以下の四句に表わされているが、それが丁度第二主題の説明のために用いられている。

第三の引用句はファウストがその時云つた言葉の始めの句、壯嚴な天の声は、強くもまた優しい響をして、この塵埃に固着している私に何を求めるのか？曾ては、柔い感情に対しては心閉ざされていたその人が、今は他の人と同様に、天来の響を素直に深く心に感ずる様になつていたので「涙が湧き出る、俺は再び地上の人となつたわい」の言葉が導き出されるのである。

(本学教授 音楽史)